

心繫げて

児童文学作家

小原 麻由美

「小原先生の『ことばの力』をお借りし、日本の教育カリキュラムにほとんど盛り込まれていないため、子どもたちが習得できていない『防災力』を少しでも高めるために、読み聞かせをしていただきたい」

名古屋市瑞穂消防署の方から、読み聞かせの依頼をいただいたのは、新刊「ありがとうの道」が発刊されてすぐの頃だった。「ありがとうの道」は東日本大震災の津波で流された一本の桜の木が、根っこから引き抜かれても横たわったままでその年の春に花を咲かせたというニュースを聞いて、桜の木の生きる力、その感動を作品にしたというエピソードがある。

消防と私の児童文学がどのように関わるのだろうか？ 初めは少々疑問だった。が、署員の方とお会いして話をし始めてすぐに、疑問は確信と喜びに変わった。素晴らしい読み聞かせ会になるという確信と、児童文学が私たちのリアルな生活の中で役立てるといふ喜びだ。

今年の防災の日の一週間前、児童館をお借りして『防災童話「ありがとうの道」読み聞かせ会』を開催することができた。集まってくれたたくさ



児童に読み聞かせ会で話される小原先生

んの子どもたちに「日ごろから自分の命や大切な人の命を守る準備をしましょう。家族で心を繋げておくためにも、常に会話をしましょう」そんなことも話した。

瑞穂消防署の方の読み聞かせ会開催に向けての準備や当日の細やかな心配り、行動を見つめながら、(ああ、これが心繋がっている方々の生きる

姿勢なのだ」と、今年の夏の最も深い想い出として私の心に残っている。

消防はチームだとよく聞く。誰か一人がヒーローになるのではなく、チームが心を繋げてひとつの命に向かい合う……そのことを読み聞かせ会の裏方をしてくださった署員の方々の姿勢で見せていただいた。

子どもたちにとって、消防車は大好きな車の上位に挙げられる。なぜだろうか？ あの赤い大きなしご車は、心繋がった消防人たちの情熱の色だからではないだろうか？ 信頼関係や絆という言葉は普段からよく使われるが、消防人の信頼関係はただの信頼関係ではなく「命を懸けた信頼関係」なのだ。純粹で情熱的で冷静で美しい信頼関係を、子どもたちは無意識に感じ取っているに違いない。

消防人は、火災や交通事故、自然災害などの現場に一番に駆けつけることや、それらの災害ができるだけ起こらないよう防災にも努めている。もし百パーセント、防災することができれば、消防人の仕事はこの世からなくなる。自分たちの仕事がなくなることを目指して日々闘っていると言っても過言ではない。

彼らは消防人として地域社会の幸せを守る。私は児童文学作家として子どもたちの未来を守る。それぞれの場所で誇りと情熱を持って生き抜いていこう！

プロフィール

児童文学作家。

保育士を経て2005年「ごめんね！ ダンスおばあちゃん」(国土社)で単行本デビュー。最新刊「ありがとうの道」(PHP 研究所刊)で初の海外翻訳出版。(2017年発刊予定)読み聞かせや講演など多数。名古屋市在住。

消防団員からは2名。まず、機能別消防団から大学生消防団員の水谷さんに、去年の4月からの密度の濃い活動を振り返ってもらいました。

大学生消防団から見た消防職員

名古屋市大学生消防団中京大学分団

水谷 光貴

私は2016年4月より発足しました名古屋市大学生消防団に所属しており、機能別消防団として地域の防災イベントや大学の防災訓練などに参加し、日々精力的に活動をしています。発足してまだ一年未満ではありますが、この短期間で得ることができた体験は私にとってあまりにも貴重で新鮮なものでした。活動を通して私は多くの名古屋市消防職員や消防団員の方々と接点や関わりを持たせていただきました。ここでは大学生消防団